

# 上田郷友会 月報

創刊明治18年 1月  
第 1415-(1)号

〒130-0022

毎月二十五日発行  
東京都墨田区江東橋一―五十五  
上田郷友会(滝澤工業株式会社気付)  
電話 〇三三三三二一〇二(代)  
振替口座 〇二〇四三三三〇九番  
平成十七年十月八日発行  
発行人 滝澤尚久  
印刷所 明德印刷出版社

## 上田郷友会創立120周年を迎えて

―上田郷友会の2度の  
苦難時代を辿ってみると―



代表幹事 滝澤尚久

### 号 念 記

上田郷友会はこの度、創立120周年を目前に迎えることが出来ました。これも一重に会員の方々のご協力の賜物と衷心より御礼申し上げます。

さて、会の記録をたどれば、この120年の間には幾多の苦難の時代が有りました。しかしその都度、歴史ある上田郷友会を何とかして残そうと言うその時の幹事の方々の献身的なご尽力と、会員の方々のご協力により上田郷友会は120年間持ちこたえ発展して参りました。今その時代時代の諸先輩のご努力に敬意の念を持って記録を読み返し、大き

く分けて60年毎の2度の苦難時代の記録を辿って見ました。

#### I 上田郷友会の創立

##### 一、夜明け前の上田郷友会

上田郷友会の設立には明治18年1月(1885年1月)とされているが、それには7年ほどの夜明け前の時代があった事が明治22年12月号及び大正4年1月号の月報に記載されている。夜明け前というのは上田郷友会のような会が必要だと感じながらも有志が話し合うだけで、正式の会としてまとまらなかった時のことである。その頃既に

必要でありその後はますます必要になるだろうがまとまることに躊躇していた日本も黎明の時代のことであった。

明治11年、既に廃藩置県の令があり学制も発布され、地方では中小の学校が漸く起り、中央では大学が設置されたこの頃、学を志す人が次第に上京するようになった。西南の役も終結したとのことで、何人かの人が東京に出て来たものの交通の便が悪く、郷里との連絡も満足に取れない。このような人同士が互いに語り合う場として、まず上田医学学生会が出来た。当時、上京した人は医学専攻の人が多かったからこの名前を付けたのであるが、1、2年の後にはその人たちの専攻分野も多くなってきたので、上田学生会と名前を変えた。しかし会の運営が難しく、一時は中断の苦境に立たされた。会の名前を上田学生親睦会と名前を変えたりして見た

が、やはり運営は上手く行かなかった。

#### 二、上田郷友会の船出

その後、上京する人は年々増え続けたので、同志が集まって永続的な会にしようと話し合ってきたのが上田郷友会である。明治17年夏の終わり頃から有志が何回か会合を重ね、12月に19条からなる上田郷友会規則が出来上がった。東京に住もうが他の地域に住もうが志を同じにする同郷の人が一団となって行く永続的な会とし、その為に会は月報を発刊する。

#### II 還暦を迎えた頃の 上田郷友会

昭和18年9月をもって創立以来上田郷友会を支えてきた宮下鈞太郎幹事が、老齢のため勇退したいと本人の口から幹事会に申し入れがあった。当時は代表幹事という名前は無いが、宮下翁は上田郷友会の創立以来の幹事で、上田郷友会の事務出版などすべてを預かっていたので、宮下翁が引退することは会の存亡にかかわることになる。幹事会では極力慰留するよう努力したが、本人の意志は固かったので、取りあえず昭和18年9月号は宮下翁の満80才の祝賀号とすることで落ち着いた。

月報を初めて発刊したのは明治18年1月であるから、上田郷友会の創立は明治18年1月という事になっているが、上田郷友会という名を付けたのは明治16年であるので、明治16年を上田郷友会の創立としても良いし、月報発刊の規約を決めた明治17年12月を上田郷友会の創立と考えても良いと明治42年12月号月報の回顧録の中に記されている。また明治18年1月の創刊号の緒言には、編集委員山極勝三郎の名でその設立の経過と上田郷友会の方針について明記されている。当時の会員の数は、明治17年には同郷の学生のみを範囲とし

ていたので20、30人程度であったが、月報を発刊した明治18年秋頃には170余人になっている。最初に発行した明治18年9月の名簿の中には山極勝三郎氏、宮下鈞太郎氏、勝保英吉郎氏などの名前が見られる。

しかし一方、当時の戦況は日本に厳しくなる一方で、発行の為に費用もままならず、翌年になると月報を印刷する紙すら手に入りにくくなった。ついに昭和19年3月号を以て上田郷友会月報の最終号として一度中断し

ようと云うことになった。あたかも前年の宮下翁の予言が的中したようであった。しかし当時の幹事の人たちは上田郷友会の不滅を唱える人が多く、また戦況が変わって上田郷友会が再起することを願うと同時に、今の形をできるかぎり維持続行して欲しいとの意見が強く、宮下翁が引退し日本の非常事態の中でも上田郷友会は続けることになった。

この時(昭和19年3月)から山浦貫一幹事の推薦で、滝澤七郎幹事が代表幹事を引き受けることとなった。上田郷友会月報は昭和19年4月から昭和20年12月号までは、月報の紙が足りず印刷もできない戦時統制下であったので、活版印刷の月報もあつたがガリ版で発行されたものが多く(昭和19年8月から昭和20年2月まで)、そのガリ版印刷も保存状態が悪くて現在写真版にして残っているものも読み取りにくいものが多い。しかしこの苦難の時代にも月報の発行と月例会は毎月開催され、会員の方々が極力参加し上田郷友会を維持しようとしていた当時の努力がうかがえる。昭和19年5月〜7月にガリ版印刷で発行された月報は、滝澤七郎幹事が

体調不調でガリ版印刷が出来なくなつたことを聞いて、8月より大塚稔氏が好意で1年間無料で活版印刷を引き受けている。上田郷友会120年の歴史のうち前半の58年間の第1号から第686号までの月報を毎月まとめ、また幹事として上田郷友会を支えてきた宮下鈞太郎翁は、昭和20年12月17日満82才で亡くなった。上田郷友会による宮下鈞太郎翁の追悼式が昭和21年2月9日上田図書館講堂で行われたことが上田郷友会月報の昭和21年1月号と2月号につまびらかに記載されている。

### III 上田郷友会のこれから

120年前に山極先生をはじめ明治の先覚者の努力により設立された上田郷友会は、戦後も着実に足取りを続け、60年が過ぎた。上田郷友会が苦難の時を乗り越えて、今2度目の還暦を迎えることができたのも、幹事の方々の骨惜しみないご助力と、会員の皆様の暖かいご協力の賜物である。設立当時の多くの先人の方々の高邁な見識と情熱および努力、そして120年の間の多くの諸先輩会員の方々のご尽力が無ければ、現在のの上田郷友会は無かつたと思う。そしてこれから

も上田郷友会は、会員の皆様喜んで頂ける月報をお送りし、一人でも多くの会員の方が参加

### 上田部会(郷里部会)の回顧10年

上田部会長 佐藤 毅

120年前の明治18年、東京に於いて上田市出身の医学生山極勝三郎、勝俣英吉郎、民生委員制度生みの親小河滋次郎の諸氏が中心となり、上田郷友会が創立された。以来120年の時が流れ、上田部会では本年1月の新年総会でこれを祝った。

先月(7月)、滝澤尚久代表幹事から電話があり、上田部会の現況を原稿用紙3枚程度にまとめてほしいと連絡があつた。8月は終戦の月で、ベルマ(現ミヤンマー)戦線に従軍した私には2つの団体から体験発表の依頼が、また、他の団体からは郷土史についての講演をしてほしいとの申し出があり、予想もしなかつた忙しい月となつた。平成7年、前任者で私の師匠でもある丸山寿先生から、突然後任のご推挙を頂き、まさに、晴天の霹靂であり大きな戸惑い

できて且つ有益な月例会を開催して行くことが、上田郷友会の使命として残されていると思う。

を覚えた。その理由は、私は上田部会会員としての年数も浅く、また、自己評価からもその任ではないと辞退申し上げた。再三私宅へ御出頂き説得されたが、家内ともども重ねて辞退申し上げた。しかし、丸山先生はすでに90歳を超えてのご高齢であり、これ以上会務を続けられないとのご判断で、私ごとき者に後事を託されたように感じた。そこで意を決し、平素私が尊敬申し上げているT氏とY氏のお二方にご相談したところ、お二方共に受諾しろと激励された。

ここから上田部会(郷里部会)の代表として会の運営に携わることとなった。

それから10余年が経過し、その間会員の増強に努め、恒例の新年総会をはじめ、毎月第1土曜日に上田市立図書館で開く例会や、史跡を訪ねて1泊の研修

旅行、野外勉強会等、会員の要望に依るべきの行事が続いてきた。これも、会員の皆様のご協力と支持を頂きながらの結果と、改めて感謝申し上げます。

30余年前、「この会も皆死ねば終りさ」と発言した人があり、これに反発した丸山寿先生が、「この歴史と伝統ある会が終るとは何たることだ」と発言し、支持者に激励され、自転車で1枚のピラ配りから始まり、郷土史家を講師に例会を開き、上田部会発展のもとを築かれたと聞いている。まさに戦後の上田部会を復興させた功労者である。

平成7年10月14日、各界からの来賓を招待し、100余名で1周年記念式典を挙行したが、地域各界の方々から大きな称賛を頂いた。先に刊行を終えた上田市誌は、近現代編の「生涯学習と文化活動」の中に上田部会を取り上げ、丸山寿先生の功績を称え、上田部会報の創刊は会の運営に新風を吹き込んだと伝えている。また東京の郷友会とも常に連絡を密にし情報を交換し、総会等の交流を深めている。それぞれが運営上の経理は別になっているが、上田部会でも理解ある会員は、東京と上田の両方の会費を負担している。

昨年上田市は市政85周年を迎え、記念事業として上田駅前新設した図書館「上田情報ライブラリー」に於いて、企画展「近代上田の文化を支えた人々」を開き、4つのテーマにより、ゆかりの品々の展示と共に講演会を行なった。上田部会も選ばれて「夢と志を貫いた上田郷友会の人々」をテーマに不肖私佐藤毅が口述の機会を与えられた。

今年3月19日、代表幹事滝澤尚久氏ご夫妻が来田され、祖父故滝澤七郎氏が昭和15年ころ、上田の生んだ幕末の偉人赤松小三郎先生の佩刀とともに、上田市に寄贈されたことになっていた彩色の赤松先生の肖像画が自家に残されていることを発見し、改めて上田市に寄贈されたもので、長年別々になっていた佩刀と肖像画がようやく一緒になった。

この佩刀は昭和15年ころ、衆議院議員であった滝澤七郎氏が、莫大な価格により前所持者より譲り受け、上田市（浅井敬吾市長）へ寄贈したもので、戦前戦後を通じて上田市役所の倉庫に眠っていたものが、昭和28年10月に幸いにも日の目を見たものである。

滝澤尚久代表幹事もこの佩刀

とは初対面であり、感慨ひとしおとお見受けした。この事実は昭和28年12月25日付郷友信濃第67号に掲載されているのを私が発見したものである。このように上田郷友会月報は、近現代史の貴重な資料として研究者に尊重されている。上田市立図書館の書架には創刊号から全巻納められ、マイクロフィルム化されている。過日も例会終了後に幹

事の方々に見て頂いた。前後したが上田郷友会創立の功労者の方々のほか、今日まで育ててくれた方々の功績にも触れてみたい。文部省に在職、57人の大臣に仕えた宮下飢太郎、飯島保作（花月）、クリスチャンの遠藤鐵太郎・恭介父子、滝澤七郎、丸山寿の各氏。総て故人となられたが感謝申し上げ、ご冥福をお祈りして筆を置く。

### 上田郷友会創立120周年を祝して

上田郷友会北米支部会長  
在ロサンゼルス南カリフォルニア  
長野県人会会長

野崎 住 吉

この度上田郷友会創立120周年を迎えられ、ここに記念大会開催と共に記念増刊号発刊の運びとなられました事を心よりお慶び申し上げます。遠い昔、上田

会発展のための重要な役割を果たされてこられました。

近郊の出身者が東京に出て、戦前戦後の逆境の中から不屈の精神でそれぞれの分野に於いて努力精進され、今日の立派な組織の発展に努め、活気と生氣溢れる先駆者の意志を脈々と継承してこられました。また地域社会への奉仕活動はもとより、一般社会の支援福祉活動にも多大な実績を残され、今日の上田郷友

120年という長い道のりを辿って来られた歴代の代表幹事を始め、会員の皆様の献身的なご尽力と熱意に対し深甚なる敬意と感謝の意を表します。この意義ある120周年という歴史有る上田郷友会の精神が、これからも幾世代の人々にわたって広く浸透し、根強く発展することを願ってやみません。今後とも上田郷友会の益々のご発展と、皆様方のご多幸を祈念しお祝いの言葉とさせて頂きます。

## 祝

# 上田郷友会

## 創立120周年記念

「会員の声」特集

### 信念の人 山極勝三郎

山極 清一

祖父山極勝三郎は人工癌の発生に成功したことで、その名を知られている上田市出身の病理学者です。1922年には日本初のノーベル賞候補に挙げられたこともありま

まりました。その後開業医でなく学者を選んだのは世界の医学会で日本の実力を示せる道と考えたのだと思います。また東京帝大の学生時代上田郷友会月報の巻頭に、学問、芸術、諸産業で薩長、土佐に遅れを取らぬ信州を形成することが延いては日本を栄えさせると述べているのも日本の将来を思う心情の表れだと思います。祖父の論文に「胃癌発生論」があります。胃癌発生は遺伝でなく外因であると喝破しています。これはドイツ留学中に習得した外因の1つの

祖父の生まれたのは文久3年で、明治維新の直前の時代であり、明治4年に廃藩置県の制度が施行され武家は仕事を失い経済的に窮乏し始めた時期です。武家の山極家は真田から松平に仕える頃から奥医師、典医と数代医者の縁を賜っていたので、それほど廃藩の影響を受けずに済みました。明治に入り山極家では家計を継承する男子に恵ま

れず、養子候補として武家の山本家の3男で学業が上田の最優秀生の祖父を選びました。医学を勉強しに外国留学の可能性もあることで、15才の時縁組が決

し遂げ、なお次の研究目標に挑戦する祖父の心情の表れとして、私の脳裏に深く刻み込まれていきます。

一方祖父は明治32年に当時は不治の病とされていた肺結核に罹り、絶対安静を守りながら、研究を続けて目的を達成した執念は驚嘆に値します。この伝染すると云われる結核菌を持ちながら、家族からは1人も感染者も出ず、また幼児であった我々

孫が遊びに訪ねても誰一人抱くこともなかったと言う徹底した静養法と感染予防を実行していました。この自分を律する信念の強さは研究以外の家庭でも発揮されていました。

### 10年ひと昔

吉田 節生

「千曲寮の理事長は、歴代上田郷友会に入会することになっていく」という清水幾男氏の勧めで、初めて出席した例会は平成7年1月のことだった。清水氏は上中及び千曲寮を通じての大先輩だったから、理由も分らないまま否応なく入会したのである。早いもので今年1月で10年の月日が流れている。

当時は例会場はまだ大東信金の会議室で、入室すると直ぐに仙人のような袴修一さんが端然として受付をして居られ、その

先に書記と司会を兼ねて清水さんが座っていた。15名の出席者は大森頼雄さん始め大先輩許りと見受けられていたので、私はつかず離れず目立たないようにしようとしそかに心に決め、清水さんの先の室の片隅になるべく座ることにした。

驚いたのは従兄に当たる松野輝彦氏が居たことである。従兄とは言へ私とは13年の年の開きがあるから、噂は耳にしたことがあるがお会いしたことはなかった。氏は例会場では何時も吉田為雄氏と一緒に、その吉田氏からはよく原子力の質問があった。長野県人からはとかく敬遠され勝ちな原子力を話題にして頂くのは有難いことなので、この時許りは積極的発言した。

この時許りは積極的発言した。中支戦線で死んだ8才年上の次兄と上中同期の方々が、大勢会員で居られることを知ったのは、大分後のことである。

入会時の例会に出席していた16人の会員の内、今居られるのは和田龍三さんと沓掛元砥さんのお2人に、翌月の例会でお目にかかった中村礼三さんだけと

なった。あの方々は体調その他様々の理由で今は出席されていない。平成9年5月の例会に清水さんが欠席するというので、書記の代わりを頼まれた。止むなく何とかこなした所、次の例会で清水氏から「後継者が出来た」と言われ「え!?」と思ったが何事もなく今迄通り室の片隅の出席を続けていたのである。

青天の霹靂は翌10年2月に起きた。例会後、清水さんから呼び止められ「老令のため書記を続ける「ズク」がなくなり「シンノ」になったので後を宜しく」ということであった。

この頃確かに清水氏は腰が曲がり、杖を突いて千曲寮の理事会に出席される姿は、はたで見ても痛々しかった。さりとて私にも私なりの事情がある。洪っていたところ、山崎延秋氏と半田收一郎氏の3人による持ち回りであろうかとの提案があった。

それではと止むなくお引き受けしたので現在に至る経緯である。その後半田氏が病のため平成11年2月からは田原敬氏に代わった。山崎延秋氏は体調からこの8月に松本勝身氏に代わる。

平成12年暮、月報書記をしていた関係で東京上田会々報の編

集をしていた村田寛専務理事から、上田郷友会創成期の群像について寄稿を求められた。古い文献を漁って行くうちに千曲寮の創設の母体こそ上田郷友会草創期のメンバーであることが分かり、清水氏が歴代寮理事長は云々と言われたことも理解出来たのである。また創立100周年余の歴史と伝統の奥行の深さにも触れた思いであった。

入会して10年余、書記を担当してからも7年余になる。入会時の若輩は何時の間にか高令出席者5指の仲間入りしてしまつた。つかず離れずで室の片隅を指向していることはもはや

必ずしも適切ではなく、残年を先人の築き上げたものを更に輝かしくするべく努めることが私に課せられた使命であろうか。

### 郷友会との縁

白田 誠人

私と郷友会との係わりは例会で紙について話題を提供した後、誘われて入会した次第です。出身は旧北佐久郡小諸町、同郷の会員は土屋侃司君で上田とは郡違いですが上田に通学した縁で会員となりました。入会以前か

ら私の住んでいる西片町の近所のお宅の石塀に山極勝三郎先生住居跡という文京区の名所旧跡を紹介するプレートが張ってあり世界で初めて人工癌の生成を成し遂げたという説明書がありました。しばらく後、山極先生は上田市出身の大先輩であることを同窓会報が何かで知り驚きと誇りを感じました。郷友会での成り立ちの説明が滝澤代表幹事からあり、東京の上田郷友会の設立に山極先生が創立メンバーの一人であったことを知り、郷友会と私とのつながりが一層深くなったように感じました。

最近体調が万全でなく欠席することが多くなり、ちょうど欠席した折に山極先生のお孫さんに当る方が会に出席なさつたことを後で聞き、お目にかかることができず残念でした。

月例会の席ではいつも目新しいまた知らなかった話題、解説など固い頭に刺激を与えて下さるような話をうかがい若返つたような気分になります。同郷のよしみで遠慮なく発言できるこの会が益々隆盛になるよう願っております。

### 郷友会と私

佐藤 操子

創立120周年の記念号作りのお話があり、改めて私と郷友会とかかわりについて考えて見ました。私が郷友会のお仲間入りをさせて頂いたのは、110周年の例大会の時にお誘いを受け、出席したのがご縁でした。

その後、毎月の会に参加させて頂くようになりました。その時にはずい分と長い伝統のある会なのだと言うのが最初の印象でした。それから早10年近くの年月が過ぎようとしています。郷友会は同郷の方々を中心のお集まりの会と言う事だけではなかなく出席した私ですが、会員の方々の多士済々ぶりや郷友会の歴史の奥深さを知れば知る程、びつくりしたり、感心したりの連続でした。又毎月の例会で皆さんが発表される内容は、文学・政治・経済・社会一般、その他と多岐にわたっています。それぞれ分野でご活躍されている方の発表なので、内容も具体的で大変わかりやすく、プリントなどの準備も丁寧で、視野の狭い私などにもよく理解

でき、いろいろと学習させて頂いており感謝です。

今日ほどなたから、どんなお話しが聞けるかな、どんなおしゃべりが出来るかななどと考えるから、今日もまたいそいそと会場に向かっている私です。

### 上田郷友会と

#### 滝澤翁のこと

清水 幸衛

私をはじめ上田郷友会の会合に出たのは終戦後でもない、20代になったばかりの頃であつたと思う。当時は時々滝澤先生も上田に帰られて上田市公会堂の一室で先生を中心に20人位の集りだつたと思うが、その中で上田蚕糸専門学校の八木教授だつたか名前も忘れてしまった。アメリカにいった話をされた。まだ飛行航路もミッドウエー經由でアメリカに行っていた頃である。その話の中で機内の食器類はすべて紙で出来ているという下りである。これがいやに頭にひっかかった。何か手品のよくな話であつた。戦後60年たった現在では何んの疑問もないが当時米も満足に食べられない頃コップもお皿もみんな紙で出来ているとは想像もつかない

か

東京に出て何年かたった頃、滝澤先生が倒れたとの知らせがあり早速日本橋蛸殻町の黒田光線治療所にかけつけると狭心症とのことでウーウーなうなうていて苦しそうで言葉など出せる状態ではなかつた。それでも何日かたつて滝澤先生の病状も大分落ち着いてこられ若先生(勝人氏)が今後のことを考え設備の整った慶応病院に入って治療に専念されるよう進言されると滝澤先生はしかと拒絶され「俺は自宅の畳の上で死ぬがいい！死後は赤飯でも炊いて祝つてもらえばいい」と頑として聞か

なかつた。それから何週間かたつたある日若先生から電話があり治療所の方へちよつと来てくれなかつたことであつた。かけてみるかと宮入博士、半田医師等郷友会の面々がいて私に滝澤先生をおんぶしてこの2階から表の自動車の中まで乗せてくれないかとのことであつた。私は体力には自信があつたから早速二つ返事で廻りの人達の介添えで滝澤先生をおんぶしようとしたら、宮入博士がだめだめ靴下をぬいで！といわれ素足で階段を下りた。これは靴下をはいているとすべる場合があるから

らだ。慎重にも慎重に無事自動車にのせることが出来た。自宅に着いて自室の床に就いた先生の安心した顔は未だに忘れられない。

### 1年を顧みて

杉田 松平

上田会の集りだかと西沢さんに誘われ、出席して早1年に成りました。此の度上田郷友会創立120周年と聞いてびつくり中々な事、先輩方には頭が下がります。会では時の話題などに意見を述べたり諺など多種又専門的な事、人生経験豊富な皆様の話には感服するばかり。私もあらゆる事に興味を持って物事の処理に当りたくこれからも出来る限り出席して勉強したいものです。

### 上田郷友会と信州と私

滝澤 政子

私が信州と関わりを持ちましたのは主人と結婚してからです。当時主人の両親は毎年旧盆を挟み1ヶ月ほど上田の新町の家に滞在しておりました。この家で私も会社の夏休みには毎年一緒に過ごしたのですが、古い田舎屋は広くてとても涼しく過ごせた事が深く印象に残っています。お墓参りを済ませた後は、上山田温泉の清風園に1泊するのが楽しみでした。父は昼間に千曲川で鮎釣りをして、夕食には鮎2匹がお膳に載っていたのは楽しい思い出です。両親が高齢で上田に行けなくなつてから、私達夫婦は旧盆には上田のお墓参りを今も毎年欠かさず続けております。

上田郷友会の月報は当時、宛名印刷と折り込み発送まで滝沢工業の本社でやっておりました。その時には折り込みの手伝いに毎月参りました。当時は宛名印刷をガリ板でしておりました。600通程の宛名印刷と発送までを数人がかりでやり、発送が終わると手伝った人は皆1部ずつ月報を持ち帰り毎月読んだものです。大変懐かしい思い出です。信州は私の故郷にもなりました。現在は月例会にまで出席させて頂いておられますが、出席者皆様のお話や発表を非常に面白く聞かせて頂いております。これから高齢化社会ではこのようなサロンの会合が重要になって来ると思います。120年の伝統ある郷友会が更に長く育つて発